

イドリース・ビドリースィー著 『八天国』の2系統の 写本の関係について

——第5部の記述内容の検討から——

今 澤 浩 二

は じ め に

近年におけるオスマン朝初期史の研究は、オスマン朝の起源をめぐるものが中心となっており¹⁾、全体的には今なお進展しているとはいいがたい状況である。その大きな原因のひとつが、叙述史料の厳しい制約にある。

オスマン朝の叙述史料として現存する最古のものは、14世紀末～15世紀初頭に成立したアフメディー Ahmedî の『アレクサンドロスの書』(*İskender-nâme*)であるが、韻文で記されているため、そこから引き出しうる情報はそれほど豊富ではない。その後、散文のオスマン朝年代記も著されるようになり、とくに第8代スルタン、バヤズィト2世(位1481～1512)の治世前半には、多くの年代記が編纂されることになった。アシュクパシャザーデ Aşıkpaşazâde の『オスマン王家の歴史』(*Tevârih-i Âl-i Osman*)²⁾、無名氏のオスマン朝諸年代記³⁾、ネシュリー Neşrî の『世界の鏡』(*Cihan-*

* 本学国際教養学部

キーワード：『八天国』、イドリース・ビドリースィー、メフメト1世、
バヤズィト2世、オスマン朝

nîmâ)⁴⁾、オルチ Oruç b. Âdil の『オスマン王家の歴史』⁵⁾ などである。さらにバヤズィト 2 世時代後半の 16 世紀に入ると、これらの年代記を史料源とする、いわば「第 2 世代」の年代記も編まれることになった。

従来オスマン朝初期史の研究には、上に挙げた「第 1 世代」の年代記が根本史料として利用されてきたが、1954 年に Ş. トゥラン氏が「第 2 世代」の年代記の一つ、ケマルパシャザーデ Kemalpaşazâde の『オスマン王家の歴史』を公刊して以来⁶⁾、この年代記の重要性が認識され、初期史研究にも利用されるようになっていく。しかしながら、ケマルパシャザーデの年代記とほぼ同時期に成立したもう一つの年代記、イドリース・ビドリースィー Idrîs Bidlîsî の『八天国』(*Hasht Bihisht*) に関してはこれまでほとんど研究が行なわれていない。オスマン朝初期史の研究における厳しい史料の制約を緩和するためにも、この年代記に関する史料研究は、喫緊の課題といえよう。

この作品は 16 世紀初頭にペルシア語散文によって著され、ケマルパシャザーデの書と同様、オスマン朝創始者オスマンからバヤズィト 2 世までの治世をそれぞれ 1 部として全 8 部にまとめた大部の史料である。この書は古くから重要史料と認識されながらも、現在に至るまで校訂が行なわれておらず、いまだ写本の状態にとどまっている。多数の写本が世界各地に散在し、閲覧・収集することに困難がともなうこと、また文飾過多なペルシア語文体で綴られていることなども、校訂作業を困難にしている理由のひとつであろう。

かつて筆者は、この史料には 2 系統の写本が存在することを指摘し、両系統の写本の由来を明らかにすることに努めた。著者ビドリースィーはまず 913 (1507/08) 年頃、バヤズィト 2 世に『八天国』を献呈したが、スルタンの側近たちによって、この書がイランの諸王を賞賛し、また文体も冗長・冗漫であると非難され、作品は没収された。そのためビドリースィー

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係については文体や内容を改訂して、919（1513/14）年あらためて第9代スルタン、セリム1世（位1512～20）に献呈したのであった。すなわち、2系統の写本はそれぞれ、この2人のスルタンに献呈された写本に由来していたのである〔Imazawa 2005〕。

では、この2系統の写本にはいかなる記述の相違が見られ、どのような特徴・性格を有しているのであろうか。次に、こうした点について具体的に検討する必要がある。前稿ではバヤズィト1世（位1389～1402）の治世に関する第4部を中心に検討したが、ここでは、それに続くオスマン朝内訌期（1403～1413）とメフメト1世（位1413～1421）時代に関する第5部を取り上げたい。第5部の記述の大部分が基本的に一つのオスマン朝年代記にもとづいており、著者ビドリースィーが原史料をどのように利用しているのかを見る上で最適と考えるからである。

『八天国』の2系統の写本を代表するのが、著者自筆の書と考えられるイスタンブル・スレイマニエ図書館所蔵の Esad Efendi 2199 写本⁷⁾と Esad Efendi 2197 写本であり、それぞれバヤズィト2世とセリム1世に献呈された作品の草稿である。献呈本ではなくその草稿を利用するのは、バヤズィトに献呈された作品が現存していないと思われること、またセリムに献呈されたもの〔Hasht-Hazine〕は、Esad Efendi 2197 写本と比較すると所々に誤字や脱文が見受けられ、はたして著者自筆の書であるのか疑問が残ることによる⁸⁾。本稿では煩雑さを避けるため便宜上、Esad Efendi 2199 写本と同2197写本をそれぞれ「バヤズィト本」「セリム本」と呼称し、この2写本の比較検討を通じて上記の問題について考察していくことにする。

Ⅰ. 『八天国』第5部

1. 記述内容と史料源

『八天国』第5部は、序文 (Muqaddima)、本文 (Dāstān)、跋文 (Khātima)

という3つの部分から構成されている。

序文では、1402年のアンカラ会戦でティムールがバヤズィト1世を撃破し、アナトリア（小アジア）を侵略していった過程が叙述されている。アンカラの戦場からはバヤズィトの皇子たち（エミール・スレイマン、イーサー、メフメト）が離脱し、取り残されたバヤズィトは他の息子ムーサーとともにティムールの捕虜となった。その後ティムールはアナトリア各地に軍隊を派遣しつつ、自身はアンカラより西方に進み、キュタヒヤを経てエーゲ海沿岸のアイドゥン地方に至り、1402/03年冬にはロードス騎士団の立て籠もるイズミル城を落とした。また、バヤズィトに征服されていたカラマン侯国、ゲルミヤン侯国、メンテシェ侯国などのアナトリア諸国を復興させた [バヤズィト本：232a-239a; セリム本：209a-214b]。

この部分の記述においては、おもにティムール朝史料ヤズディー Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī の『勝利の書』(*Zafar-nāma*) が利用されている。それは、バヤズィト1世がマフムード・ハーンによって捕らえられたとする箇所 [バヤズィト本：235a-b; セリム本：211b; Yazdī: 413a] や、バヤズィトの息子エミール・スレイマンがブルサ、イズニクを経由してルメリ（バルカン）のエディルネに逃走したとする点 [バヤズィト本：236b; セリム本：212b; Yazdī: 416b-417a] などから明瞭に見て取れる。ただし、メフメトがアマスィヤ、トカトを中心とするルーム地方に逃走した経緯 [バヤズィト本：232a-234a; セリム本：209a-211a] については、後述するオスマン朝年代記 *Ahval* の情報が利用されており、また、イーサーがブルサ近郊に潜伏したこと [バヤズィト本：236b, 257b; セリム本：212b, 228a] に関しては、オックスフォード大学所蔵の無名氏のオスマン朝年代記写本⁹⁾に近いものが利用されている [Oxford Anonymous: 44b]。

本文は28の章に分かれたれ、第1～23章 [バヤズィト本：239a-285a; セリム本：214b-250a] ではティムールがアナトリアを去ったあと起こった

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について
バヤズィトの息子たちによる権力抗争、いわゆるオスマン朝内訌期（空位
時代）について記されている。

内訌序盤はメフメトとイーサーがブルサの支配権をめぐる抗争し、メフメトが勝利をおさめた（1403年）。次いで、それを知ったエミール・スレイマンが、拠点としていたルメリからアジア側に渡り、メフメトを破ってブルサを支配したが、メフメトは東方のルーム地方に立て籠もって抗争を続けていった。その後、メフメトの庇護下にあったムーサーがルメリに渡り、その地で支配権を広げると、スレイマンもアナトリアから舞い戻り、ムーサーと戦闘を繰り返すことになったが、結局はムーサーに滅ぼされた（1411年）。こうしてルメリに支配権を打ち立てたムーサーがアジア側のメフメトと敵対するようになったため、メフメトは数度のルメリ遠征の末ムーサーを打倒して、オスマン朝内訌は最終的にメフメトの勝利で終結したのであった（1413年）。

続いて第24～28章〔バヤズィト本：285a-297a；セリム本：250a-258b〕では、メフメト1世の治世に関して叙述が行なわれる。カラマン遠征やワラキア遠征、シェイフ・ベドレッディンの乱などについて記され、最後に、跋文〔バヤズィト本：297b-298a；セリム本：258b-260a〕ではメフメト1世の死と息子ムラト2世の即位の経緯が記述されている。

その史料源については、行論上まず後半部分のメフメト1世の治世について検討したい。この部分では、前述したネシュリーの書が中心史料として利用されている。この年代記に関する詳細な研究を行なったメナージュ氏によると、ネシュリーはまず全6部から成る世界史である『世界の鏡』を著し、その後、第6部だけを独立させ、内容・文体も改訂して『オグズ・トルコ族の歴史』（*History of the Oghuzian Turks/Oğuz Türkleri Tarihi*）にした。メンツェル氏旧蔵写本〔Neşri-Mz〕は『世界の鏡』第6部の草稿に属する写本であり、この清書版の写本は現在に伝わっていない。メンツェ

ル写本をのぞいて、現存する諸写本はすべて『オグズ・トルコ族の歴史』に属するものであり、これらは、マニサ (Mn)・イスタンブル (A) 写本と、パリ (Pa)・ウィーン (W)・イスタンブル (F, V) 写本との2グループに分けられる [Ménage 1964: 9, 29-30, 41-53, 81]。『八天国』第24章では、カラマン遠征の際メフメト1世が発病し、メヴラーナー・シェイヒーという医師の治療を受けたことが記されているが、この記述は、メナージュ氏がすでに指摘しているように [Ménage 1964: 50]、ネシュリーの『オグズ・トルコ族の歴史』の第2グループの写本 (Pa, W, F, V) のみが記すものである。したがって『八天国』はこのグループに属する写本を利用したということができよう。

メフメト1世の治世に関しては、ネシュリー以外に、その主要な情報源となったアシュクパシャザーデの年代記も利用されているようである。たとえば『八天国』第25章では、ルーム地方周辺にタタール族がいるのを知ったメフメトが「これらの集団の指導者は誰か」と尋ねたのち、族長のミンネット・ベイを呼び出し、その集団とともにヨーロッパ側に移住させたことが記されている¹⁰⁾。これに関しては、多くの年代記に記述が見られるが [Aşık-Giese: 80; Aşık-Ist: 425; Neşri-Mz: 145; Neşri-Mn: 217; Neşri-Ank: 542; Anon-Giese: 53; Anon-Topkapı: 63; Oruç-Ox: 43; Oruç-Cm: 110; Oruç-Paris: 34a-b]、メフメトがタタール族の長について尋ねたことを記しているのは、ネシュリーのメンツェル写本とアシュクパシャザーデだけである。上述のように『八天国』はネシュリーの『世界の鏡』に属する写本は利用していないから、この記述はアシュクパシャザーデにもとづいたものと考えられる。

また、前述のオックスフォード大学所蔵のオスマン朝年代記写本に近い写本も利用されている。第28章ではメフメトによるワラキア遠征について記され、メフメトが征服した4つの城砦の名 (Sakçı, Yeni Sala, Norgoran,

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について Yergöğü) が挙げられているが [バヤズィト本: 296b; セリム本: 258a], それらはオックスフォード写本でのみ言及されるものである [Oxford Anonymous: 104a]。

さて、本文の前半部、オスマン朝内訌期に関する『八天国』の記述の主要な史料は、内訌終結後まもなくメフメト1世の宮廷で著されたと思われるオスマン朝年代記である。この書は、アンカラの会戦直後から弟ムーサーに対する最終的な勝利(1413年7月5日)に至るまでのメフメトの事績を平易なオスマン・トルコ語で記しているが、本来の独立した作品としては現存せず、上述のオックスフォード写本やネシュリー史の本文に取り込まれる形で伝わっている [Oxford Anonymous: 45a-101b; Neşrî-Mz: 98-141; Neşrî-Mn: 151-210; Neşrî-Ank: 366-516]。近年、この書を中心史料にすえてオスマン朝内訌期の諸事件を解明することに努めた研究書が上梓された¹¹⁾。その著者はこの年代記を *Aḥvāl-i Sultān Mehmed* と名づけ、*Ahval* と略称している。本稿でもこの語を用いる。

ところで、『八天国』の著者ビドリースィーは *Ahval* を利用するにあたって、いかなる写本を用いたのであろうか。*Ahval* の写本そのものを利用した可能性と、この年代記が取り込まれたオックスフォード写本系統の写本やネシュリーの書を利用した可能性とが考えられる。ビドリースィーは、トルコ語で著された *Ahval* をペルシア語に翻訳しており、また一部要約していることもあって、その判断は容易でない。ただし『八天国』は前述のように、内訌終結後のメフメトの治世に関してネシュリーとオックスフォード系統の写本を利用しているから、内訌期の部分でも、これらの年代記を通じて *Ahval* の記述を参照したと考える方が自然であろう。

これ以外に、無名氏のオスマン朝諸年代記も利用されているようである。第20章によると、エミール・スレイマンはエディルネでエスキ・ジャーミーの建設を始めたが、完成させることなく滅んだ。このためムーサーがそれ

を引き継いだが、やはり未完のままメフメトに排され、最終的にエスキ・ジャーミーはメフメトによって完成させられたという〔バヤズィト本：275b-276a; セリム本：243b〕。これは、無名氏のオスマン朝諸年代記のうち、W1 タイプの写本に記されている内容であり〔Anon-Giese: 55; Anon-Topkapı: 37a〕、したがってビドリースィーはW1 タイプの写本を利用したと考えられる¹²⁾。

2. 独自情報

以上の検討から、『八天国』第5部ではティムール朝史料ヤズディーの『勝利の書』や、オスマン朝年代記 *Ahval*, ネシュリー史, オックスフォード所蔵の年代記写本に代表される写本, アシュクパシヤザーデ史, 無名氏のオスマン朝諸年代記が利用されていることが確認された。しかしこれ以外に、現在には伝わらない史料からの引用も散見される。重要と思われるものをいくつか挙げてみよう。

(1) イーサーの滅亡

オスマン朝内訌期の序盤は、首都ブルサの支配権をめぐるメフメトとイーサーが争い、イーサーが滅ぶ結果となった。*Ahval* によるとイーサーの最期は、「カラマン〔地方〕に落ちのび、その地で消息を絶った」ことになっている〔Oxford Anonymous: 77a; Neşri-Mz: 122; Neşri-Mn: 184; Neşri-Ank: 450〕。このようにイーサーの最期が曖昧な表現になっているのは、まだ当時のオスマン朝社会では正当な理由なく兄弟を殺すことは受け入れられておらず、*Ahval* の著者がメフメトの声望を傷つけないよう配慮したためであるという〔Kastritsis 2007: 210〕。しかしビドリースィーが『八天国』を執筆した時代にはすでに「兄弟殺し」の慣例が確立しており、そのため『八天国』では直截な表現が用いられることになった。

「彼（イーサー）の生死ははっきりしなかった。……しかしいくつか

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

の言い伝えでは次のようになっている：スルタン（メフメト）が王権の館ブルサにもどってしばらくすると、スルタンの吉兆なる耳に、イーサー・チェレビが少数の従者とともに再びエスキシェヒルのいくつかの場所に潜伏し、なお王国に現われ出ようとする邪な考えを抱いているとの知らせが届けられた。スルタンはただちに200名の側近を彼のもとに派遣し、その地で彼を処刑するよう命じた。この一団がエスキシェヒルに到着した時、イーサー・チェレビはハンマームに入っていた。彼らは彼を捕らえ、密かに弓の弦で絞め殺した」¹³⁾

この時代、オスマン朝皇子の処刑は、高貴な血を流すことを避ける絞殺が一般的であったから [Kastritsis 2007: 92]、この記述の信憑性は高いと思われる¹⁴⁾。

(2) アナトリア西部の征服

Ahval は、イーサーがカラマン地方で消息を絶ったあと、彼を支援していたイズミル侯（ジュネイト）がメフメトのもとを訪れて謝罪し服従を表明したため、メフメトも彼を赦したことを記し、それに続いて、アイドゥン、サルハン、テケ、メンテシェ、ゲルミヤン地方を征服したと簡単に記述している [Oxford Anonymous: 77a; Neşri-Mz: 122; Neşri-Mn: 184; Neşri-Ank: 450]。『八天国』において、イーサー処刑後イズミル侯が謝罪し、メフメトもこれを受け入れたとする部分は *Ahval* にもとづいていると思われるが、それ以外の敵対勢力、とくにサルハン侯国に対する処罰に関しては、現存しない別の史料を参照して、詳細な記述を行なっている。なお、『八天国』の文体はかなり装飾的で、逐語訳では意味が取りづらいことがあり、また紙幅の制限もあるので、ここでは概略だけを記すことにする（以下、“ ” は概要であることを示す）。

“メフメトはアイドゥン地方の領地を奪い、側近の者に与えた。サルハン侯フズル・シャー・ベイは暢気に自分の領地で時を過ごしていた。

メフメトは報復の機会をつかみ、少数の軍隊を率いて進軍した。メフメト軍が到着した頃、フズル・シャーはハンマームで服を脱いでいた。メフメト軍がハンマームを包囲し、フズル・シャーをハンマームの脱衣所からメフメトのもとに連行した。フズル・シャーは処刑される前に2つのことを嘆願した。1つは、自分の遺体が祖先と一緒にマニサに埋葬されることである。2つ目は、彼の王家に属する建築物への寄進財産が変更されることなく保護されることである。メフメトもこの2つの願いを受け入れ、そのあとフズル・シャーは処刑された。サルハンの領地もメフメトの従者たちの管理下に入ったあと、そこからゲルミヤン地方に向かった。ゲルミヤン侯はメフメトに服従した。メフメトも彼に好意を与え、領地の支配権を以前のように彼に与え、支配の座に置いた。この進軍において、アイドゥン、メンテシェ、サルハン、テケ地方に報復を行なった”[バヤズィト本：266a-267a; セリム本：235a-b]

(3) カラマン遠征

1413年7月、弟ムーサーをソフィア近郊チャムルル Çamurlu の戦いで滅ぼしてオスマン朝内訌を終結させたメフメト1世は、ムーサーとの抗争中にブルサを攻撃していたカラマン侯に対し遠征を行なった。

“カラマン侯国の首都コンヤでの戦いに敗れたカラマン侯メフメトは、息子ムスタファをコンヤ城に立て籠もらせ、自身はタシュ・イリの山中に逃げ込んだ。オスマン軍がコンヤ城を攻囲し陥落寸前となると、カラマン侯はメフメト1世の宰相バヤズィト・パシャに使者を送って謝罪の意を伝え、和睦を求めた”[バヤズィト本：286a-287a; セリム本：251a-b]

このあと『八天国』では、前述したように、メフメト1世が発病したためメヴラーナー・シェイヒーがその治療にあたったことがネシュリーにも

イドリース・ビドリースー著『八天国』の2系統の写本の関係についてとづいて記されている。『八天国』はそれに続いて、以下のような情報を伝えている。

“カラマン侯から和睦を求められたバヤズィト・パシャは、それを受け入れることを知らせて、カラマン侯がタシュ・イリから出てきたところを急襲して捕らえた。これを知ったメフメト1世は喜び、病気も癒えた。バヤズィト・パシャを賞賛し、彼に宰相位に加えて、バイレルベイ職 (masnad-i amir al-umarā'i) も与えた。カラマン侯には、コンヤ城に立て籠もっている息子ムスタファを説得するよう要求し、カラマン侯もこれに応じ、コンヤ城の下まで来て説得を行ないムスタファを投降させた” [バヤズィト本：287b-289a; セリム本：252a-253a]

ネシュリーによると、メフメト1世によるカラマン遠征は2度行なわれたことになっているのに対し [Neşri-Mz: 143; Neşri-Mn: 213-214; Neşri-Ank: 526-534], 『八天国』では1度の遠征としてまとめて記述されている点に注意は必要であるが、遠征の詳細を伝えている点で重要であろう。

(4) シェイフ・ベドレッディンの乱

メフメト政権にとって最大の危機のひとつは、シェイフ・ベドレッディンの反乱であろう。この乱についてはさまざまな史料記述があり、『八天国』においてもいくつかの独自情報が見られる。たとえば、アシュクパシャザーデ史と無名氏のオスマン朝諸年代記では、ベドレッディンの弟子ボルクルジェ・ムスタファ Börklüce Mustafa がアイドゥン地方のカラブルンで反乱を起こすと、当時ルーム地方の支配を任されていた皇子ムラト（のちのムラト2世）とバヤズィト・パシャがメフメト1世の命を受けてこの反乱を鎮圧し、そのあとマニサに来て共謀者であったトルラク・フー・ケマル Torlak Hu Kemal を処刑したことが記されている [Aşık-Giese: 81; Aşık-Ist: 426; Anon-Giese: 54; Anon-Topkapı: 36a-b]。ネシュリー史では、メフメトがバヤズィト・パシャだけを派遣したになっており、ムラト

には言及されない [Neşri-Mz: 146; Neşri-Mn: 218; Neşri-Ank: 544]。これに対して『八天国』では、ムラトひとりがカラブルンでボルクルジェ・ムスタファとケマル・トルラク Kemal Torlak (Kamāl Tūrlaq) を滅ぼしたことになるっており、バヤズィト・パシャにはいっさい言及されない [バヤズィト本: 293b; セリム本: 255b-256a]。

また、シェイフ・ベドレッディンがヨーロッパ側のデリ・オルマンで反乱を起こすと、『八天国』では、他の年代記とは相違して¹⁵⁾、バヤズィト・パシャがこの鎮圧に派遣され、ベドレッディンの支持者たちを籠絡してベドレッディンを捕らえさせ、セレスにいたメフメト1世のもとに連行したことが記されている [バヤズィト本: 294a; セリム本: 256a]。

ベドレッディンの処罰に関して、オスマン朝諸史料では、メフメトがハイダル・ヘレヴィー Haydar Herevî に「処刑は合法である。財〔の没収〕は違法である」とのファトワー（教令）を出させて処刑したことになるが [Anon-Giese: 55; Aşık-Giese: 82; Neşri-Mz: 146-7; Neşri-Mn: 218; Neşri-Ank: 546]、『八天国』はメフメトがハイダル・ヘレヴィーにベドレッディンと論争するよう命じ、その中でベドレッディンが過ちを認めたため、メフメトによって処刑されたことを記している¹⁶⁾。

(5) ティムルタシュの息子ウムル・ベイ

アシュクパシャザーデとネシュリーによると、メフメト1世は軍隊を派遣してコンスタンティノーブル対岸のアジア側の諸都市 (Gebze, Hereke, Darıca [Darucı], Pendik, Kartal) を征服させたが [Aşık-Giese: 83; Aşık-Ist: 429; Neşri-Mz: 147; Neşri-Mn: 218-219; Neşri-Ank: 548]、『八天国』ではこれらの都市を征服した軍隊を率いたのが、ティムルタシュの息子ウムル・ベイであったと特記されている [バヤズィト本: 295b; セリム本: 257b]。なお、このウムル・ベイはオスマン朝内訌期にムーサーに最後までつき従っていた人物としても言及されており [バヤズィト本: 284a; セリム本:

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について
249b], ムーサー滅亡後メフメトに仕えるようになったと考えられる。

II. 2 系統の写本の相違と特徴

こうした内容を含む『八天国』第5部の2系統の写本にはどのような相違や特徴が見られるのか。本章ではこの点について検討を行なうことにする。

まず、地名の表記に関して相違が見受けられる。たとえば、オックスフォード写本 [Oxford Anonymous: 48b] で **قغالا** Qaghālā と記されている地名が¹⁷⁾、バヤズィト本 [242a] では **قعالا** Qa‘ālā, セリム本 [217b] では **قوالا** Qawālā となっている。これは、まずビドリースィーがバヤズィト本でオックスフォード系統の写本にもとづき、ただし **غ** の上の点を付けず、**ع** と記した。次にセリム本を作成する際、**ع** を **و** と見誤ったものと推測される。

このように、本稿で利用した『八天国』の2写本（とくにバヤズィト本）でアラビア文字の点がしばしば省略されているが、それはこれらの写本が草稿だからであろう。オックスフォード写本 [Oxford Anonymous: 50b] とネシュリー [Neşri-Mn: 156-157; Neşri-Ank: 380] に見られる **فلنبل** Fe-lenbol という地名も¹⁸⁾、バヤズィト本では点が付けられず、**فلس** となっている。セリム本では **فلس** と表記されているが、これは、バヤズィト本で点が付いていない **ن** と **ب** を **س** と見誤ったためと考えられる。

また、オックスフォード写本 [Oxford Anonymous: 72a] では、**كورلايه يندى** Gürle'ye yetdi (「イーサーは」 Gürle に至った) という文章が見られる¹⁹⁾。バヤズィト本でこれに相当する箇所は **بجانب كورلانه روى نهاد** となっている。つまり、ビドリースィーはトルコ語の接尾辞 **يه** も含めた **كورلايه** 全体をひとつの地名と誤解し、さらに **يه** の点も付けなかったものと思われる。セリム本 [233a] では、バヤズィト本の **كورلانه** に誤った点が付けられて、**كورلانه** となっている²⁰⁾。

こうした地名表記の異同は、セリム本がバヤズィト本をもとに作成されたことを示している。バヤズィト本の清書版はバヤズィト2世の側近たちによって没収され、おそらく散逸したため [Imazawa 2005: 893-895]、ビドリースィーはその草稿であるバヤズィト本を利用せざるを得なかったのであろう。しかしながら、その際セリム本ではバヤズィト本を忠実に引き写すことはせず、文章を大幅に要約ないし省略するといった改訂が行なわれたようである。その理由のひとつは、バヤズィト本の清書版をバヤズィト2世に献呈した際、側近たちによって、この書が冗長・冗漫であると批判されたことにある [Imazawa 2005: 896]。

では、どのような要約・省略が行なわれているのか、いくつか例を取り上げて考えてみたい。

序文において、アンカラの戦場からバヤズィト1世の皇子たちが離脱したことが記されている。その一人エミール・スレイマンは、バヤズィト本 [236b] ではティムール朝史料ヤズディー [Yazdi: 416b, 417a] にもとづいて、まずブルサに向かい、そこからイズニクを経由して船でヨーロッパ側のルメリに渡ったことが記されている。

「エミール・スレイマン・チェレビは、ルメリのエミールたちと軍隊の一部をとまって戦場からブルサに向かった。少数の者たちとともに逃走した。しかし敵軍が背後に迫っていることを確信すると、大いに動揺して、父親の財宝をできるだけ多く持ち去り、イズニクに向かった。〔オスマン〕軍の多くも逃走し、その地方にいた者はみな皇子エミール・スレイマンに合流し、イズニクに逃走した。敵軍が向かっているとの知らせが届くと、〔スレイマンは〕すべての騎兵とともに船でルメリに渡った」

これに対してセリム本 [212b] では、

「エミール・スレイマン・チェレビは、ルメリのエミールたち、司令

イドリース・ビドリースー著『八天国』の2系統の写本の関係について

官たちの一部をともなって戦場からブルサに向かった。そこから少数の者たちとともに海を渡り、エディルネに向かった。その地域にあった王家の財をできるだけ多くルメリに持ち去った」

となっている。たしかに文章は簡潔なものとなっているが、エミール・スレイマンはアンカラからブルサに向かい、そこからルメリに渡ったことになっており、イズニクを経由したことが省略されているのである。

また第9章では *Ahval* にもとづいて、アンカラからルーム地方へ逃走した皇子メフメトがティムールからの呼び出しを受けて、アナトリア西方に向かったことが記されている。バヤズィト本 [252b] では、*Ahval* と同様 [Oxford Anonymous: 63a; Neşri-Mz: 112; Neşri-Mn: 170; Neşri-Ank: 412], メフメトがアマスィヤからオスマンジュク *Osmançuk* に至り、さらにそこからデルヴァズ *Dervaz* (デルヴェス河畔) に達すると、以前メフメトに敗れたカラ・ヤフヤー (ジャンダル侯イスフェンディヤルの甥) が報復のためメフメト一行を襲撃したことが述べられている。これに対してセリム本 [224b] では、メフメトのデルヴァズへの到着が省略され、あたかもオスマンジュクでカラ・ヤフヤーが攻撃をしかけたかのように記されている。同様に第22章では、バヤズィト本 [279a] は *Ahval* にもとづいて [Oxford Anonymous: 95a-b; Neşri-Mz: 136; Neşri-Mn: 203-204; Neşri-Ank: 498-500], ブルサからアンカラに至ったメフメトが、その地の支配を任せていた家臣ヤクブ・ベイを命令違反のかどでトカトに投獄したことを述べているが、セリム本 [246a] は、メフメトがアンカラに至ったという記述を削除しており、ブルサでヤクブを処罰したことになる。

またセリム本では、バヤズィト本で言及されるいくつかの人名も削除されている。一例を挙げると、第18章ではアナトリアに進軍してきたエミール・スレイマンとメフメトとの戦闘について叙述されているが、バヤズィト本 [270b] はスレイマンがエヴレノス・ベイを斥候として派遣し、これ

を知ったメフメトも Jebel-oğlu Muhammad と Horos-oğlu Ahmed を送り、両軍の間で戦闘が起こったことを、*Ahval* にもとづいて記している²¹⁾。これに対してセリム本 [239a] ではメフメトが派遣したこの2人の名が削除されている。

このように、セリム本はバヤズィト本の記述内容を削除・要約しているが、それが過度に行なわれ、原史料の文意をそこなっていることもまま見られるのである。概して、バヤズィト本の方が原史料に忠実であると言える。

さらに、セリム本がバヤズィト本に記された諸事件の年代を誤って修正している点にも注意が必要である。バヤズィト本 [289b] の第25章の章題では「818 (1415/16) 年から820 (1417/18) 年までの間」(در مابین شهر سنه ثمان عشر وثمانمیه تا به شهر سنه عشرین وثمانمیه) に起こった諸事件を述べると記されている。セリム本 [253b] でも当初はバヤズィト本と同様の年代が記されていたが(فی مابین سنه ثمان عشر وثمانمیه تا شهر سنه عشرین وثمانمیه)、のちに ثمان عشر と、 عشرین の末尾の ین が赤インクで塗りつぶされ、「808 (1405/06) 年から810 (1407/08) 年までの間」(فی مابین سنه ثمان وثمانمیه تا شهر سنه عشر وثمانمیه) と修正されている。またその本文に関してバヤズィト本では、818年にメフメトがワラキア遠征を行なったこと [290a]、819年にアナトリア東部で動乱が起こり、その機に乗じてジャンダル侯イスフェンディヤルがサムスンを征服したこと [290b-291a] が記されており、それに続く第26章では、820年にシェイフ・ベドレッディンの乱が起こったとなっている [292b]。これに対してセリム本では当初バヤズィト本に記されたこの3つの年代にしたがっていたが、のちに赤インクで、それぞれ810年、809年、810年と修正されている [253b, 254a, 255b]。最初の810年に関して、セリム本では ثمان عشر وثمانمیه の ثمان が塗りつぶされているが、本来は عشر を塗りつぶして「808年」にしたかったのであろう。

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

このように修正された理由は不明であるが、これ以前の第20章では両写本ともにエミール・スレイマンが滅んだ年を814（1411/12）年と記しており²²⁾、またそもそも第24章以降は816（1413）年に内訌期を終結させたあとのメフメトの治世に関するものであるから、この修正は明らかに誤っている。また、この修正は著者ビドリースィー自身によって行なわれたものと考えられ、後世に行なわれたという可能性はほとんどない。なぜなら、このセリム本を元にしてほどなく作成されたセリム1世への献呈本でも、セリム本で修正された年代が記載されているからである〔cf. Hasht-Hazine: 292a, 292b, 293a, 294b〕。また筆者の手元にあるセリム本系統の別の2写本にも、修正後の年代が記されている〔cf. Hasht-Nur: 257b, 258a, 259a; Hasht-Revan: 318b, 319a, 319b, 321a〕。おそらくこの系統に属する後代の写本すべてにこの誤って修正された年代が受け継がれていったのであり、この瑕疵は重大であろう。

しかしその一方でセリム本には、バヤズィト本の誤った記述内容を訂正した部分やバヤズィト本にはない独自情報が、数は少ないが、見いだされる。たとえば序文において、バヤズィト本〔234a-b〕ではメフメトは父バヤズィトが捕らえられたことを知りながら、アマスィヤ方面に逃走したことになるが、セリム本〔210b-211a〕では、アマスィヤ方面に逃走したあとにバヤズィトが捕虜となったことを知ったというように、*Ahval*の記述に合う形で修正されている。また、ルーム地方にもどったメフメトは、その地のトルコマン諸部族の反乱に遭うが、セリム本〔217a-b, 218b〕ではこの反乱がティムールの命令にしたがって起こされたものであったという記述が追加されている。

お わ り に

以上、『八天国』第5部の記述内容に関して、バヤズィト本とセリム本

を比較検討して、両写本の相違について考えてきた。

セリム本は、バヤズィト本の記述を大幅に削除・要約するといった改訂を施したものであった。たしかにバヤズィト本と比べると文体が簡潔となり、文意も明確になっている。しかしこの改訂が過度に行なわれた結果、地名や人名などが削除され、あるいは誤った形で記され、バヤズィト本の伝える本意をそこなうことがしばしば見られるようになった。こうしたことから、セリム本はバヤズィト本の改訂版というよりもむしろ要約版に近いものであり、バヤズィト本の方が原史料に忠実で、史料としてより優れているということができよう。これは第5部に限らず、全8部を通じていえることであろう。

従来の研究では専らセリム本の系統に属する写本が使われてきたが、今後は、セリム本で大幅に省略・要約された記述が多く残るバヤズィト本（あるいはその系統の写本）こそが利用されるべきである。その上で、バヤズィト本には見られない修正や独自情報を含むセリム本もあわせて参照される必要があろう。

文献略号

[史料]

バヤズィト本：İdrîs Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2199.

セリム本：İdrîs Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2197.

Anon-Giese: *Die altosmanischen anonymen Chroniken*, (ed.) Fr. Giese, Band I, Breslau, 1922.

Anon-Topkapı: *Anonim Osmanlı Kroniği (1299-1512)*, (ed.) N. Öztürk, İstanbul, 2000.

Aşık-Giese: *Die altosmanische Chronik des 'Âşikpaşazâde*, (ed.) Fr. Giese, Leipzig,

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

1929.

Aşık-Ist: Âşık Paşazade, *Osmanoğulları'nın Tarihi*, (eds.) K. Yavuz & M. A. Y. Saraç, İstanbul, 2003.

Hasht-Nur: İdris Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, Nûruosmaniye Kütüphanesi, 3209.

Hasht-Revan: İdris Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan 1514.

Hasht-Hazine: İdris Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Hazine 1655.

İbn Kemal, IV. Defter: İbn Kemal (Kemalpaşazâde), *Tevârih-i Âl-i Osman*, IV. Defter, (ed.) Koji Imazawa, Ankara, 2000.

İbn Kemal, VII. Defter: İbn Kemal, *Tevârih-i Âl-i Osman*, VII. Defter, (ed.) Ş. Turan, 2 vols., Ankara, 1954, 1957.

Menakıbnâme: H. J. Kissling, “Das Menâqybnâme Scheich Bedred-Dîn's des Sohnes des Richters von Samâvnâ,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 100 (1950): 112-176.

Neşrî-Ank: Mehmed Neşrî, *Kitâb-ı Cihan-nümâ*, (eds.) F. R. Unat & M. A. Köymen, Ankara, 1949.

Neşrî-Mn: *Ğihânnümâ: Die altosmanische Chronik des Mevlânâ Mehmed Neschrî II: Text des Cod. Manisa 1373*, (ed.) F. Taeschner, Leipzig, 1955.

Neşrî-Mz: *Ğihânnümâ: Die altosmanische Chronik des Mevlânâ Mehmed Neschrî I: Einleitung und Text des Cod. Menzel*, (ed.) F. Taeschner, Leipzig, 1951.

Neşrî-Öztürk: Mevlânâ Mehmed Neşrî, *Cihânnümâ* [6. Kısım: *Osmanlı Tarihi* (687-890/1288-1485)], (ed.) N. Öztürk, İstanbul, 2008.

Oruç-Ox: *Die frühosmanischen Jahrbücher des Urudsch*, (ed.) Fr. Babinger, Hannover, 1925: 3-75.

Oruç-Cm: *Ibid.*: 79-139.

Oruç-Paris: *Oruç Beğ Tarihi* [*Osmanlı Tarihi – 1288-1502*], (ed.) N. Öztürk, İstanbul, 2008.

Oxford Anonymous: H. E. Cengiz & Y. Yücel (eds.), “Rûhî Târîhi,” *Belgeler* 14(18) [1989-92]: 359-472.

Sadeddin: Hoca Sadeddin, *Tâc üt-Tevârih*, vol. 1, İstanbul, 1280 H.

Yazdi: Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Zafar-nāma*, (ed.) A. Urunbayev, Tashkent, 1972.

〔研究〕

Beldiceanu-Steinherr, Irène (1970) “Un legs pieux du chroniqueur Urui,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 33: 359-363.

Bosworth, C. E. (1997) “Suleymān Čelebi” *Encyclopaedia of Islam*, New ed., vol. 9.

Dindar, Bilal (1992) “Bedreddin Simāvi” *Türkiye Diyanet Vakfı İslām Ansiklopedisi*, vol. 5, İstanbul.

Imazawa Koji (2005) “İdris-i Bitlisi’nin *Heşt Bihişt*’inin İki Tip Nüshası Üzerine Bir İnceleme,” *Belleten* 69 (256): 859-896.

今澤浩二 (2011) 「Dimitris J. Kastritsis 著 *The Sons of Bayezid: Empire Building and Representation in the Ottoman Civil War of 1402-1413* (The Ottoman Empire and its Heritage 38) Leiden & Boston: Brill, 2007. (xxiii+250pp.+3 maps)」
『西南アジア研究』74 [掲載予定]

İnalçık, H. (1962) “The Rise of Ottoman Historiography,” in *Historians of the Middle East*, (eds.) B. Lewis & P. M. Holt, London: 152-167.

İnalçık, H. (1991) “Meḥemmed I,” *Encyclopaedia of Islam*, New ed., vol. 6.

İnalçık, H. (1994) “How to Read ‘Āshik Pasha-zāde’s History,” in *Studies in Ottoman History in Honour of Professor V. L. Ménage*, (eds.) C. Heywood & C. Imber, Istanbul.

Kafadar, Cemal (1995) *Between Two World: The Construction of the Ottoman State*, Berkeley.

Kastritsis, Dimitris J. (2007) *The Sons of Bayezid: Empire Building and Representation in the Ottoman Civil War of 1402-1413*, Leiden & Boston.

小山皓一郎 (1971) 「初期オスマン史書アシク・パシャ・ザーデ・ターリヒについて」『イスラム世界』8: 1-24.

Lowry, Heath W. (2003) *The Nature of the Early Ottoman State*, New York.

Ménage, V. L. (1962) “The Beginnings of Ottoman Historiography,” in *Historians of the Middle East*, (eds.) B. Lewis & P. M. Holt, London: 168-179.

Ménage, V. L. (1964) *Neshri’s History of the Ottomans: The Sources and Development of the Text*, London.

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

Ménage, V. L. (1967) “On the Recensions of Uruj’s ‘History of the Ottomans,’”
Bulletin of the School of Oriental and African Studies 30 : 314-322.

Ménage, V. L. (1976) “Edirne’li Rûhî’ye Atfedilen Osmanlı Tarihinden İki Parça,”
in *Ord. Prof. İsmail Hakkı Uzunçarşılı’ya Armağan*, Ankara: 311-333.

小笠原弘幸 (2005) 「オスマン朝起源論争史 (1916年-2005年)」『オリエント』
48(1) : 208-222.

注

- 1) たとえば, Kafadar 1995; Lowry 2003; 小笠原2005を参照のこと。
- 2) アシクパシャザーデの年代記, いわゆるアシクパシャザーデ史 (Aşıkpaşazâde Tarihi) は, オスマン朝初期に関する最重要の史料である。著者は1400年頃生まれ, 第6代スルタン, ムラト2世時代 (1421~1451) の諸戦役やコンスタンティノープル包囲戦にも参加し, その後イスタンブルで隠棲していた1484年に執筆を開始した (執筆時期には諸説ある)。彼はおもに, 後述する無名氏のオスマン朝諸年代記やオルチ史と共通の史料, および自己の見聞にもとづいて叙述を行なったとされている。アシクパシャザーデとその作品については, 小山 1971; İnalçık 1994 を参照のこと。
- 3) トルコやヨーロッパ各地の図書館には『オスマン王家の歴史』と題する非常に多くの写本が保管されており, 一般に, 無名氏のオスマン朝諸年代記と総称される。これらの写本群は, ギーゼ氏がそのテキストを校訂する際に利用したウィーン所在の2写本を示す記号を用いて, W1 タイプ (バヤズィト2世時代まで記述されたもの) と W3 タイプ (16世紀のスレイマン1世時代まで記述が続けられたもの) との2系統に大別される。両タイプとも, オスマン家の系図, エルトゥールルの父スレイマン・シャーのアナトリアへの移住, エルトゥールルと息子オスマンの事績で始まっており, バヤズィト2世時代初期の891 (1486) 年まではほぼ同内容であるが, それ以降, 両タイプの記述内容は完全に分岐する。分岐するまでの部分で両タイプが大きく異なるのは, W1 タイプが, W3 タイプにはない多くの記事を含んでいることである。ギーゼ氏は14種の写本をもとに校訂を行なったが [Anon-Giese], その際, W3 タイプの写本はW1タイプの要約版であり, したがって W1 タイプの写本がよりオリジナル・テキストに近いと考え, 校訂本では, 分岐する箇

所まではこれを底本とした。しかしその後の研究では、W1 タイプの写本はのちに多くの記事が追加されたものであり、それよりは W3 タイプの写本がオリジナル・テキストに近いことが明らかにされている [Ménage 1962: 172; Ménage 1967: 314-315]。また近年、トプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵の一写本 (W1 タイプ) のファクシミリ版 (およびローマ字転写) も出版された [Anon-Topkapı]。

- 4) この年代記は世界創造から始まる 6 部構成の世界史で、1486 年以降まもなく成立したと思われるが、今日に伝わっているのは、オスマン朝史にあてられた第 6 部のみである。ネシュリーが利用した主要な史料はアシュクパシャザーデの年代記であり、用語上きわめて近い対応関係が見られる。また、後述するオックスフォード大学所蔵の一写本 [Oxford Anonymous] に伝えられたテキストも使われている。この校訂本としては、メンツェル氏旧蔵写本およびマニサ写本のファクシミリ版 [Neşri-Mz, Neşri-Mn] と、アンカラで出版された、ウィーン写本を底本にしたもの [Neşri-Ank] とがある。また、メンツェル写本のローマ字転写版 [Neşri-Öztürk] も出版されている。
- 5) オルチについては、16 世紀初頭にエディルネに住んでいたことが確認される以外 [cf. Beldiceanu-Steinherr 1970]、ほとんど不明である。オルチは無名氏のオスマン朝諸年代記やアシュクパシャザーデ史と共通の史料 (ムラト 2 世時代初期に成立) を利用しており、とくに無名氏の年代記と密接な関係を持っているが、オルチの方がより早い時期 (メフメト 2 世時代) に成立したテキストを利用しており、したがってオルチの伝えるテキストは、よりオリジナル・テキストに近いといえる [Ménage 1962: 172; İnalçık 1962: 154]。

メナージュ氏によると、おそらくオルチは 2 つの版をつくったという。その一つは、900 (1494/95) 年、あるいはその後まもなくつくられ、バビンガー氏が校訂したオックスフォード写本とケンブリッジ写本がそれを代表する [Oruç-Ox, Oruç-Cm]。いま一つは、アシュクパシャザーデ史からの借用も含む改訂版であり、908 (1502/03) 年まで記述が続けられたもので、906 (1500/01) 年に執筆が開始された。このテキストは、おそらくほとんどすべてがパリ国立図書館所蔵の 2 写本 (Mss. Paris Bibliothèque Nationale, Supplement Turc 1047 [Oruç-Paris]; Anc. Fonds Turc 99) に受け継がれた [Ménage 1967: 322]。

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

- 6) İbn Kemal, VII. Defter. 筆者もかつてこの年代記の第4部の校訂を行なった [İbn Kemal, IV. Defter]。
- 7) この写本は、同図書館所蔵の Esad Efendi 2198 写本と一連のものであるが、Esad Efendi 2199 写本が第1～6部を、同2198写本は第7～8部を含んでおり、このため本稿では Esad Efendi 2199 写本のみを取り扱う。
- 8) これらの写本の詳細については、Imazawa 2005: 863-864, 869 を参照のこと。
- 9) Ms. Bodleian Library, Marsh 313. この写本は、その写真版（およびローマ字転写）が「ルーヒー史」（1511年以降に成立）として公刊されたが [Oxford Anonymous]、実際はルーヒー史の主要な史料源となった年代記であり、889 (1484) 年で記述が終わっている [Ménage 1964: 11; Ménage 1976: 312]。なお、この写本の写真版には葉数が見えないが、本稿では、参照を容易にするため、たとえば写真版1ページ目右段・左段をそれぞれ 1a, 1b として示すことにする。
- 10) バヤズィト本: 291b. ただし、セリム本 (254b) では、メフメトが指導者について尋ねた部分が省略されている。
- 11) Kastritsis 2007. なお、この研究書に関する書評 [今澤 2011] も参照のこと。また、オックスフォード写本とネシュリーのメンツェル写本にもとづくこの年代記の校訂（ローマ字転写と英訳）も行なわれた (D. Kastritsis [ed.], *The Tales of Sultan Mehmed, Son of Bayezid Khan* [Ahvāl-i Sultān Meḥammed bin Bāyezīd Hān]: *Annotated English Translation, Turkish Edition, and Facsimiles of the Relevant Folia of Bodleian Marsh 313 and Neşri Codex Menzel*, Harvard University, 2007)。
- 12) ただし第27章では [バヤズィト本: 295a; セリム本: 257a], エスキ・ジャーミーはムーサーによって建設が始められ、メフメトによって完成したという W3 タイプの写本の情報も記されている [cf. Anon-Giese: 154]。ビドリースィーは無名氏のオスマン朝年代記を数種参照したのかもしれない。
- 13) バヤズィト本: 266a. セリム本 (235a) でも、文体等に相違は見られるが同内容のことを伝えている。
- 14) 従来、イサーの処刑については、『八天国』のセリム本系統の写本にもとづいた後世の年代記、サーデディンの『歴史の冠』（16世紀）の記事が

引用されてきた。しかしながら、弓の弦で絞殺したという具体的な描写は行なわれず、「〔メフメトの200の部下たちがイーサーを〕ハンマームで見つけ、彼（イーサー）の魂の鳩を死の世界に飛ばせ、彼の幸運の馬を無の世界に走らせた」という比喩的な表現になっている [Sadeddin: 235]。

- 15) 無名氏のオスマン朝諸年代記とアシュクパシャザーデ、ネシュリーは互いによく似た記述を行なっているが、アシュクパシャザーデとネシュリーによると、ベドレッディンのもとに集まった支持者たちがベドレッディンに失望して彼を捕らえ、セレスのメフメトのもとに連行したことになる [Aşık-Giese: 72; Aşık-Ist: 427-428; Neşri-Mz: 146; Neşri-Mn: 218; Neşri-Ank: 546]。これに対して無名氏のオスマン朝諸年代記は、ベドレッディンの支持者たちがベドレッディンに失望したところまでは同様であるが、そのあと支持者たちがベドレッディンのもとを去ったこと、メフメト1世が多くの子部を派遣してザグラでベドレッディンを捕らえ、セレスに連行したことを記している [Anon-Giese: 54; Anon-Topkapı: 36b]。またオルチによると、メフメトはカプジュ・バシュ（門衛長）を200人の者とともに派遣してザグラでベドレッディンを捕らえ、セレスに連行した [Oruç-Ox: 45; Oruç-Cm: 111. Oruç-Paris (36a) はカプジュ・バシュの名をエルヴァン・ベイと明記している]。

1460/61年に孫ハリルによって著されたベドレッディンの伝記では、メフメトがカプジュ・バシュのエルヴァン・ベイを200人の部下とともに派遣し、彼らはベドレッディンを捕らえてセレスに連行したことが記されており [Menakıbname: 169]、オルチや無名氏のオスマン朝諸年代記はこれにもとづいたものかもしれない。

- 16) バヤズィト本: 294a-b; セリム本: 256a-b. なおオルチ史でも [Oruç-Ox: 45; Oruç-Cm: 111; Oruç-Paris: 36a], ハイダル・ヘレヴィーがベドレッディンと論争して屈服させたことになっている。またベドレッディンの伝記でもハイダル・ヘレヴィーがベドレッディンと論争を行なったことが記されているが、それによるとハイダルは2日間にわたった神学上の論争に敗れ、ベドレッディンを処刑する理由がないことを主張した。しかし、バヤズィト・パシャと皇子たちの師傅ファフレディン〔・アジェミー〕が処刑を強行したという [Menakıbname: 172-173]。ベドレッディンの乱に関してはさまざま

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

な研究が行なわれてきているが、それらによるとハリルが主張するように、
ベドレディンは無実であり、反乱の意図さえなかったともいわれている
[Dindar 1992: 334]。

- 17) ネシュリー史では، **فغل** [Neşri-Mz: 101; Neşri-Mn: 155]، **حفل** [Neşri-Ank: 374] となっている。
- 18) ただし Neşri-Mz: 102では **فلتيل** となっている。
- 19) ネシュリー史では **كورليه يتدى** となっている [Neşri-Mz: 119; Neşri-Mn: 179; Neşri-Ank: 438]。
- 20) これに類するものは他にも見受けられる。たとえば，**بافره** Bafra という地名がバヤズィト本 [291a] では **نافره** となっており，**ب** の点が付けられていない。これを誤ってセリム本 [254b] では **نافره** Nafra としている。
- 21) Oxford Anonymous: 82b. ただしネシュリーは Jebel-oğlı を “Çil-oğlı” [Neşri-Mz: 127], “Sal-oğlı” [Neşri-Mn: 190; Neşri-Ank: 464] と記している。
- 22) バヤズィト本: 275b; セリム本: 243a. ただしスレイマンが死んだのは，ギリシア語史料によると1411年2月17日であり [Kastritsis 2007: 154; İnalçık 1991: 975]，ヒジュラ暦に換算すると813年シャッワール月22日となる [cf. Bosworth 1997: 843]。

The Relationship of the Two Versions of the Ottoman Chronicle *Hasht Bihisht* : As Seen from Volume 5

Koji IMAZAWA

In the early 16th century, Idrīs Bidlīsī wrote an Ottoman chronicle entitled *Hasht Bihisht* (The Eight Paradises) in the elaborate Persian style at the command of the Ottoman Sultan Bayezid II (1481–1512). This work is composed of 8 volumes, each of which is allotted to the reign of an Ottoman Sultan, from Osman, the founder of the Ottoman Empire, to Bayezid II, the eighth Sultan. In my earlier paper, I pointed out that the manuscripts in Istanbul of this work were classified into two groups and clarified that one group originated in the work dedicated to Sultan Bayezid II in about 913/1507–08, and that the other group originated in the work dedicated to Sultan Selim I (1512–20) in 919/1513–14.

In this paper, I try to clarify the relationship between the two existing versions of the chronicle, represented by MSS Süleymaniye Library, Esad Efendi 2199 (MS Bayezid) and Esad 2197 (MS Selim) respectively, comparing the differences of the accounts in volume 5 of the Ottoman civil war (1403–1413) and the reign of Mehmed I (1413–21). I conclude that MS Selim is a revision which summarizes and even sometimes eliminates the accounts of MS Bayezid. However, thanks to its being excessively revised, the meanings of the accounts of MS Bayezid are often distorted in MS Selim. Therefore I conclude that MS Bayezid is closer to the original sources and a more reliable historical document than MS Selim.

So far, manuscripts belonging to MS Selim have been used in studies on Ottoman history. I propose that future historians should first utilize MS

イドリース・ビドリースィー著『八天国』の2系統の写本の関係について

Bayezid (or manuscripts belonging to it), which retains many accounts deleted or distorted in MS Selim, and only then consult the latter, which contains a small amount of original information.